

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」

(2017 年度第 2 回研究会)

日時：2016 年 12 月 2 日（土） 13:00-18:00

場所：AA 研マルチメディア会議室（304 室）

概要報告

2017 年度第 2 回の例会として開催された本会では、共同研究員による 2 題の研究報告がおこなわれた。各研究報告に対し、隣接領域の専門家からのコメントがあり、そのうえで全体討論をおこなった。参加者は 12 名であった。

(1) 伊藤悟（AA 研共同研究員、京都文教大学/日本学術振興会）

「徳宏タイ仏教文書『リークヤート』をめぐる実践の現状」

徳宏タイの上座仏教社会にて実践されてきた創作仏教書『リークヤート』の現状と伝承活動における諸問題が概観され、特にテキストをつくる「作詩」という側面から、徳宏タイ文字の識字率の低下や仏教書の読解能力の低下といった書承文化の危機がどのような具体的問題を抱えているのかが示された。習得困難な作詩の様々な技法や執筆の工夫は、そのまま読解能力における具体的問題の映し鏡でもあることが指摘された。

報告に対して、『リークヤート』テキストの残存状況、また『リークヤート』が書承文化として特に重視される理由について質疑があった。また、即興性とテキストのあり方などの点についても議論がおこなわれた。

(2) 清水享（AA 研共同研究員、日本大学）

「彝文辞典（字典）について」

中国の西南地方に居住する彝族は、独自の言語である彝語を話し、独自の文字である彝文字を用いている。こうした彝族の彝文字に関する辞書の状況について、その現状と課題について報告がおこなわれた。彝文辞書の歴史を簡単に振り返り、主に

1980年代以降に刊行され、報告者が実際に参照した28種類の彝彝、彝漢、漢彝などの辞典（詞典）、辞典、語彙集などについて、その形態、刊行意図、地域的な差異などが考察され、彝文辞書の特徴の分析が示された。

報告に対して、方言区と辞書の特徴についての質疑がおこなわれた。また、辞書出版が重ねられることの社会的意味についての議論もおこなわれた。

(3) 全体討論

本年度が研究計画最終年度であることを踏まえ、次年度の成果公開についての話し合いがおこなわれた。研究代表者より、論文集の執筆題目と、分量の調整、また全体構成について案が提示され、了承された。

なお、本年度はあと一回の例会の開催が計画されている。2月から3月にて調整することが確認された。

(文責：山田敦士)